

てカドでやられちゃろ。百姓連もみんな見てらんねえんだよ。今じゃこつちの味方だ。ここは女の執念は強いぞ。機動隊に向っていくのも女だ。泣き泣きかみついていくよ。おらは何も卑怯なことなんかしていねえ。埋めねえでくれって言うだけなんだ。

干拓なんか考えたやろうは、いい目は見られねえから干拓にすべえって言ったのは町長らだ。町長らが意地になつてやつてんだよ。町長も選挙の時は干拓のこと一言も言わないんだからなあ。

干拓は、これでは始められめえ。立消えになんであんなめえか。いいや、甘くは見られねえ。やつらは何やつかわかんねえ。自民党でも誰でもいい、新しい知事になつて止めてくれればいいんだよなあ。

◇ ◇ ◇

玉造から見た高浜入干拓予定地は実に美しいところだった。この美しい霞ヶ浦を埋めるとすれば、それなりの理由がある筈であった。干拓しなくては生きていけないというぎりぎりの場がある筈であった。しかし、その理由はまことに、あいまいであり、漁民達の生存権をかけた叫びだけがじかに伝わって来ただけなのである。

私は戦中派だから、公益とか国家意志などが一つの癒しがたい傷として刻み込まれていて、信じる事ができ

るのは一人の人間の真の叫びであって、私もまた、私の内部からつき動かされるものに従う以外にないと思いつている。ひとりの人間には自決の権利があるのであって、国家と個人、体制と個人ではなく、人間と人間、個の対立だけが実感し得るものだと思いつている。私たちが庶民にとつては、封建制であろうと、資本主義体制であろうと、いわゆる政治的体制というものは、大きすぎる怪物のように姿が見えず、その本質は幻想としか掴まえないのであって、そのような得体の知れない長いものに巻かれてばかりはいられないのだ。

そうはいっても、私たちが社会体制と有機的につながりを持つている以上、この体制の中の安定と繁栄に乗って、霞ヶ浦と同様、次第に変質していく自分をも認めないわけにはいかない。それは力学的必然というものかも知れず、少数の人間がどんなに叫ぼうとも、霞ヶ浦は水ガメ化し、高浜入はやがて干拓され、工業製品は開発途上国に送りこまれて精神の荒廃を招き続け、秘密結社の金持たちは大急ぎでポケットをふくらませ、権力者の幻想は完成するだろう。そして、私たちは、その後でもなお、政治と金とを優位に置き、それに従属し、進歩に対する過信を捨て切れず、物質的繁栄のために、ひとりの人の涙を見てみぬ振りをし続けるのだろうか。